

【宗祖法然上人御法語】

(第二)立教開宗

1

「おほよそ仏教おほしといえども、所詮戒定慧の三学をばすぎず。」

本来、仏の教えは多くあるとはいえ、煎じ詰めればそれらはすべて、戒律を守る
こと、心を静める禅定、そして煩惱を断ずる智慧の三学におさまります。

2

「いわゆる所謂小乗の戒定慧、大乘の戒定慧、顕教の戒定慧、密教の戒定慧也。」

いわゆる小乗仏教における三学、大乘仏教における三学、顕教における三学、
密教における三学です。

3

「しかるに、わがこの身は戒行において一戒をもたもたず、禅定において一つもこれをえず。」
しかしながらこの私は、戒律ではわずか一戒さえもつことができず、禅定を
修しても心は何一つも変わりません。

4

「人師釈して、尸羅清浄ならざれば三昧現前せずといへり。」

師は戒を守り清らかにその身を保たなければ、仏に見える境地など得られるもので
はないとおっしゃっています。

5

「又、凡夫ほんぶの心は物にしたがひてうつりやすし、たとへば猿猴えんこうの、枝につたふがごとし。」

また、私たち凡夫ほんぶの心は物事にとらわれて移りやすく、あたかも猿が枝から枝へと移るようなものです。

6

「まことに散乱して動じやすく、一心しづまりがたし。」

実にあちこちと散り乱れて落ち着かず、一つの境地に定まりにくいものです。

7

「無漏むろの正智しょうち、なによりてかおこらんや。」

迷いなき覚りの智慧はどのようにして発おこるのでしょうか。

8

「若し無漏むろの智劍ちけんなくば、いかでか悪業煩惱あくごうのきづなをたたんや。」

もし、迷いなき覚りの智慧という劍が無ければ、悪業あくごうに絡められた煩惱の絆などどのように断ち切れるのでしょうか。

9

「悪業煩惱あくごうのきづなをたたずば、なんぞ生死繫縛しょうじけいばくの身を解脱げだつすることをえんや。」

その絆を断ち切らなければ、どうして生死の迷いの世界に縛り付けられたこの身を解き放つことなどできましようか。

10

「かなしきかな、かなしきかな、いかがせん、いかがせん。」

ああ、まことに悲しいことではありませんか、ああいったいどうすればよいのでしょうか。

11

「ここに我等ごときは、すでに戒定慧の三学の器にあらず。」

「この私ごときなど、やはり戒・定・慧の三学に堪えうる器ではない。」

12

「この三学のほかに、我が心に相應する法門ありや。」

三学のほかにこの愚かな私の心にみあう教えははたしてあるのだろうか。

13

「我が身に堪へたる修行やあると、よろづの智者にもとめ、諸の学者にとぶらひしに、おしふるに

人もなく、しめすに輩もなし。」

この私にも堪えうる修行はあるのだろうか」と、多くの智慧ある賢者を探し求め、様々な学者を訪ねましたが、そうしたことを教えることができる人もなく、助言してくれる仲間もおりませんでした。

「然る間、なげきなげき経蔵きょうぞうにいら、かなしみかなしみしょうぎょう聖教しょうぎょうにむかひて、手づからみづからひらき見しに、善導ぜんどう和尚かしょうの観経かんぎょうの疏しよの、」

そうこうして、嘆きながらも經典の蔵にこもり、悲しみにくれながらも經典に向かい、一々隅々まで自らひもといっていました。すると善導ぜんどう大師だいしの『観経疏かんぎょうしよ』にある、

「一心いっしんに専らもつぱ弥陀みだの名号みょうごうを念ねんじ、行住ぎょうじゅう座臥ざがに時節じせつの久近くこんを問とはず、念々ねんねんに捨すてざるもの、これを正定しょうじょうの業ごうと名なづく、彼のか仏ほとけの願がんに順じゆんずるが故ゆえに。」

「ただひたすらに心をよせて阿弥陀仏みようごうの名号みょうごうを称なえ、歩いていても止まっても、座ざついても横よこになついても、いついかなる時も、また時間の長い短いにかかわらず、常にこれを相続せんじょうすることを阿弥陀仏みようごうが選せん定じょうされ往生ごうじんが定じょうまつた行ぎょう、すなわち正定しょうじょうの業ごうと名な付ける。なぜなら阿弥陀仏みようごうの本願ほんがんに適あつた行ぎょうだからである」

「といふ文もんを見得みえてのち、我等わがらがごとくの無智むちの身みは、偏ひとえにこの文もんをあふぎ、もはらこのことわりをたのみて念々ねんねんふしやしゃ捨すの称しょう名なを修しゆして、決けつ定じょう往生ごうじんの業ごういん因いんに備びふべし。」

とのお言葉を目の当たりにしました。それ以後、私たちのような無智むちの者は、ひとえにただそのお言葉を仰あおぎ、ひたすらその道理だうりをたのみに、常じょうにお念ねん仏ぶつを相続せんじょうして勤ごんめ、必ず極樂往生ごくらくごうじんを遂すげるよう備びえるべきと思おもひ定じょうめたのです。